

CASE

3

岐阜の紙くず屋、カンボジアでジンを作る。

株式会社サンウエスパ



(一社)岐阜みらいポータル協会
おおはら けんじ
センター長 **大原 基秀**
1978年、岐阜市生まれ。慶応義塾大学卒業後、飲食店、町工場、コンサルティング会社、ITベンチャーを経て、2021年10月きふしスタートアップ支援事業・センター長に就任(岐阜市からの委託事業)。個人の起業創業、市内企業の新規事業・第二創業等の相談支援業務を行っている。

今回は、岐阜市の古紙回収業者が興す奇想天外な話。「株式会社サンウエスパ」という会社をご存知だろうか。1969年に創業した同社は、原田匡氏が3代目社長に就任すると、2016年にシュレッダーダスト(紙くず)からバイオエタノールを製造開始、2017年にはカンボジアに渡り「ホテイアオイ」という害草からエタノールを製造する試みを始め、2022年にはそのエタノールからクラフトジン(蒸留酒)を製造、販売に至っている。伝統的な古紙回収業者からいかに進化を遂げたか、原社長に話を聞いた。第二創業を考えている後継ぎ経営者には、是非ご一読いただきたい。



原 匡 社長

—実際に紙くずからバイオエタノールを製造し始めたのは、約4年後のことでした。

—紙くずからバイオエタノールを製造する発想は、どのように思い浮かんだのですか。
2012年8月の日本経済新聞に、カイコウオオソコエビという深海エビからセルロースを分解し、エタノールの原料の糖に変える酵素が発見されたという記事を偶然見たんです。我々が取り扱っている紙くずもセルロースで構成されているので、その

2012年当時、紙くずからエタノールを製造できても収益は図れないと思っていましたが、アイデアだけは残しておいたんです。そうしたら2016年のある業界新聞で、関西大学の片倉啓雄教授がセルロースからのバイオエタノール製造についてのコスト化を研究されていることを知り、時を同じくしてエタノール製造装置を本社工場に導入、翌年から共同研究が始まりました。

—それから約5年経ちましたが、状況はいかがですか。
現在も研究は続けていますが、やはりコストの壁が高く、実用化には至っていません。日本では、エタノールをガソリンに3%まで混入させることが認められており、ガソリンより安くすることを目指していましたが、酵素の購入コストや流通経路などがネックとなり、現時点では付加価値を付けることは難しいかなと。バイオエタノールは、世界の大手企業の工場でも国の補助金がなければ赤字という現実があり、なかなか障壁が高いです。

—しかし、原社長はただでは転ばなかった。紙くずからバイオエタノールを製造する事業はうまくいかなかったかもしれませんが、エタノールの製造方法は当社の財産として残りました。ちょうどその時に、JICAの海外開発コンサルタントからのアドバイスで、カンボジアに目を向けてみました。我々が着目したのは、トンレサップ湖という大きな湖に繁殖する

「ホテイアオイ」という水草でした。このホテイアオイは異常な繁殖力ですぐに湖面を覆ってしまい、水上交通や漁業の妨げとなるため、世界の侵略的外来種ワースト100に指定される害草となっています。

—そこで、カンボジアで害草からエタノールを製造する試みを始めたのですか。

ホテイアオイの繁殖力には驚きでしたが、ビジネスチャンスはあるなと。まずはこの害草からバイオエタノールを製造し、現地の水上生活者が使うボートの燃料にすることを目指しました。トンレサップ湖には(土地を持っていない)水上生活者がたくさんいますし、害草の回収を仕事として提供することで、彼らの暮らしも改善したいという強い思いもありました。しかし、ここでもコストの壁が立ちました。

—ここでもコストの壁が...どのように乗り越えましたか。

我々が作るエタノールの付加価値をより高くするにはどうすればいいか、考えることができました。その結果、飲料用アルコールにすれば売価が跳ね上がることに気づき、ホテイアオイを原料とするバイオエタノールを用いたクラフトジン(蒸留酒)の製造にシフトしました。カンボジアにはスパイスなど豊富なボタニカルがあるので、格好いい極上のクラフトジンを

作ろうと。すべてのエネルギーを注ぎ込みました。

—害草から抽出したバイオエタノールを用いたクラフトジンは、完成しましたか。

2020年3月に現地に子会社を設立し、ヘッドハントした人材を現地責任者として送り込みました。そこから高品質なジンを生み出すべく、原料や製法にこだわり2年がかりでレシピを開発し、クラフトジン「MAWSIM」が完成しました。今春からカンボジアの飲食店やホテルなどに卸しており、日本でも今年7月からオンラインショップで販売しています。「MAWSIM」とはアラビア語で「季節」の意味で、季節風(モンスーン)の語源となっています。大航海時代にスパイスを求めた数多の帆船を運び、鎖国時代の長崎にオランダのジンを届けた「風」にちなんで名づけました。



クラフトジン「MAWSIM」

—最後に、今後の展望についてお聞かせください。

昨年11月に「MAWSIM」のテイステイニングバーを、カンボジアの首都

プノンペンにオープンしました。昼は蒸留所兼オフィス、夜はテイステイニングバーとしてMAWSIMの世界観を体感できます。このMAWSIMを世界に広めていくことが当面の目標ですね。2店舗目のテイステイニングバーは、是非岐阜市に作りたいと思っています。また、このクラフトジンの事業が、環境省が主催する「第10回グッドライフアワード」の環境大臣賞を先日受賞しましたが、ホテイアオイを核としたエネルギー事業はまだ完成していません。水上生活者のボート用燃料やガソール(アルコール混合ガソリン)の実用化を目指していきたいです。

センター長の視点

近年、一つの事業体で複数の社会課題・環境課題を解決する企業が注目を浴びている。原社長率いる株式会社サンウエスパもその一つであるが、「どのようにしてビジネスアイデアが生まれるか」「新しい事業をする・しないの意思決定はどのように行うか」聞いてみたところ、原社長の回答はシンプルかつ明快であった。前者の質問については「常に情報をインプットすること、すぐに引き出せるように整理しておくこと」、後者については「もちろん数字分析はしますが、最終的には自身がやりたいかどうか、その先に面白さがあるかどうか決めています」とのことだった。原社長が次に何を興すか、楽しみでならない。



カンボジアのトンレサップ湖。害草のホテイアオイが湖面一面に広がっている。